

岡山県農業総合センター 総合調整部企画調整課 杉本真一

平成4年から岡山農試が開発している水稻不耕起乾田直播栽培は、ほ場表面に排わらや多少の雑草があっても播種・施肥・施薬・覆土を一行程で行うことができる極めて省力的な栽培法である。この栽培法は、従来の耕起乾田直播栽培に比べてほ場の地耐力が高いので、天候の影響を受け難く計画的な作業を行いやすいという利点がある。また、播種期が水利慣行や温度条件にあまり制約されないのので、当県南部地帯においては3月上旬からビール大麦跡の6月上旬まで播種期を分散させることができ、稲作規模の拡大や、複合経営における他作目との労働分散にも極めて有効である。

ところで、この不耕起乾田直播栽培には、代かきや碎土・整地のような既発雑草を一掃し得る耕種作業が一切含まれていないので、全ての雑草を除草剤で処理する必要がある。なかでも、播種期前後から入水期までの除草は、処理適期を逸すると顕著な雑草害を招くおそれがある一方で、液剤や乳剤の散布が主体となるため、省力的でかつ効

短によって異なるので、一律に作成することができない。当県南部の乾田直播栽培地帯では、以前から行われている耕起乾田直播栽培の経験により特に問題なく除草がなされているが、規模拡大に伴い播種期を早めた場合、あるいは、直播栽培の経験のない地帯に不耕起乾田直播栽培を普及させるためには、それぞれの栽培条件にあわせた除草体系が必要となってくる。

そこで、3月上旬から6月中旬播種の不耕起乾田直播栽培を対象に、播種期と水稻出芽始期の関係や主要雑草の発消長、乾田期間中に処理する各種除草剤の特徴等を調査し、任意の播種期と入水期に応じた除草体系を組むための方法を検討したので、その概要を紹介する。

1. 水稻出芽始期の予測

非選択性茎葉処理除草剤の水稻出芽前処理は、不耕起乾田直播栽培の除草回数低減に極めて有効であるが、その特性から水稻の出芽始期を過ぎると使用できない。また、出芽始期の年次変

表-1 播種から出芽始期までの日数と一次元ノンパラメトリック法による予測誤差

品 種	播種期と出芽始期までの日数 ^{a)}				一次元ノンパラメトリック法による予測誤差 (日)
	播 種 期 (月/日)	出 芽 始 期 (月/日)	期間日数 (日)	期間日数の 標準偏差	
日本晴 アケボノ	3/7~6/16	4/25~6/24	55~7	14.63	1.28
	3/7~6/16	4/23~6/24	53~7	14.51	1.40

a) 平成5~8年 乾籾播種。日本晴16点、アケボノ15点のデータ

は播種期や入水期までの長

表-2 日平均気温とDVR

日平均 気温	DVR	
	日本晴	アケボノ
0℃	-.018971	-.016570
1℃	-.015545	-.013545
2℃	-.012119	-.010520
3℃	-.008693	-.007493
4℃	-.005249	-.004443
5℃	-.001769	-.001317
6℃	.001796	.001953
7℃	.005523	.005468
8℃	.009498	.009353
9℃	.013826	.013759
10℃	.018622	.018770
11℃	.023972	.024426
12℃	.029976	.030830
13℃	.036690	.038014
14℃	.044093	.045893
15℃	.052117	.054345
16℃	.060678	.063242
17℃	.069668	.072467
18℃	.078924	.081885
19℃	.088363	.091438
20℃	.097965	.101087
21℃	.107726	.110809
22℃	.117604	.120598
23℃	.127571	.130464
24℃	.137585	.140373
25℃	.147623	.150305
26℃	.157661	.160236
27℃	.167699	.170168
28℃	.177737	.180099

気温から ± 1.4 日の誤差で予測可能であった(表-1)。この方法は、播種日以降、日平均気温(毎正時24回の平均)に対応する発育速度(DVR)を毎日積算し、その積算値が1.0に達する日を出芽始期と推定するもので、表-2に日本晴とアケボノの日平均気温とDVRの関係を

表-3 過去23か年の気象から推定した播種日別の出芽始期とその変動

播種日 (起算日)	日本晴		アケボノ	
	出芽始期の平均 (月・日)	標準偏差 (日)	出芽始期の平均 (月・日)	標準偏差 (日)
3月1日	4.25	5.3	4.24	5.1
3月11日	4.25	4.6	4.24	4.6
3月21日	4.25	3.9	4.25	4.0
4月1日	4.28	3.2	4.27	3.4
4月11日	5.2	3.5	5.2	3.7
4月21日	5.8	2.5	5.8	2.6
5月1日	5.16	2.1	5.15	2.1
5月11日	5.23	1.2	5.23	1.3
5月21日	5.31	1.3	5.31	1.2
6月1日	6.9	0.8	6.9	0.8
6月11日	6.18	0.9	6.18	0.9
6月21日	6.28	0.9	6.28	0.9

動が大きい早播き栽培では、処理期限の判定が難しい。そこで、一次元ノンパラメトリック法による水稻の出芽始期予測を試みたところ、水稻の出芽始期は日平均

示した。

また、この方法を岡山農試における過去23か年の気象にあてはめ、播種日別に出芽始期とその年次変動を調べた結果を表-3に示す。4月以前の播種では、 $\pm 5.3 \sim 2.5$ 日の年次変動が見込まれたが、この変動幅は一次元ノンパラメトリック法による予測誤差より大きいので、本法は3~4月播種における出芽始期の変動予測に有効といえた。一方、5月中旬以降の播種では出芽始期の変動幅が予測誤差より小さくなるので、不耕起乾田直播の事例がない地帯での出芽始期予測には有効であるが、その年次変動は予測不可能であった。

2. 不耕起ほ場における主要雑草の発消長

表-4 乾田期間におけるノビエ、メヒシバ、イボクサの時期別葉齢増加速度(葉/日)

草種	生育時期	4月			5月			6月			7月
		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
ノビエ	平均		0.17	0.18	0.17	0.19	0.25	0.27	0.31	0.35	0.35
	平均+標準偏差			0.18	0.19	0.21	0.33	0.31	0.35	0.37	0.41
メヒシバ	平均		0.17	0.18	0.17	0.21	0.22	0.24	0.27		
	平均+標準偏差			0.20	0.19	0.24	0.30	0.30	0.39		
イボクサ	平均	0.17	0.24	0.23	0.27	0.28	0.24	0.28	0.35		
	平均+標準偏差			0.25	0.31	0.31	0.25	0.31	0.41		

平成7~9年 ノビエ21回、メヒシバ11回、イボクサは7回調査の集計。
ノビエとメヒシバは発生から6~8葉期まで、イボクサは10~16葉期まで調査。

時期別の除草剤散布適期を明らかにするため、ノビエ、メヒシバ、イボクサについて旬別の葉齢増加速度を調査した(表-4)。この調査は冬雑

草をあらかじめ防除した不耕起ほ場で、自然状態における発生始期から6月半ばまで発生時期別に数個体ずつ2～3日毎に葉齢を調査し、それぞれで生育の速かった2～3個体について集計したものである。

不耕起ほ場における水田夏雑草の発生は、スズメノテッポウ等冬雑草の繁茂によってかなり抑制されるが、これらを防除した場合、ノビエの発生始期は4月第2～第4半旬で、水稻の出芽早限より2週間程度早かった。葉齢の増加速度は5月半ばまでは1日当たり0.2葉程度であったが、これ以降は遅いほど生育が速くなり、入水期前後の6月中・下旬には1日当たりの葉齢増加速度は0.3～0.4葉に達した。時期別発生数は5月中旬にピークを示した。メヒシバは発生始期が4月第3～第6半旬でノビエよりやや遅かったが、発生後の葉齢増加速度においては

ノビエと大きな差はなかった。発生数は5月中旬～6月上旬に多かった。イボクサは、従来の耕起乾田直播栽培では発生がみられなかったが、不耕起乾田直播栽培では急増し、乾田期間中の優占草種の一つとなった。発生始期は3月第5半旬～4月第3半旬で、4月以降旺盛な生育を示した。発生数は4月上旬頃に顕著に多く、以後急減したが、入水期まで断続的に発生した。

3. 土壌処理除草剤の効果と水稻に対する影響

乾田直播栽培においては雑草の発生を抑制する土壌処理除草剤の効果が大きい。除草回数低減のため、通常茎葉処理除草剤等と同時に処理されることが多い。そこで、平成7年から3か年、計10回にわたって、未登録剤を含む数種の土壌処理除草剤を茎葉処理除草剤と同時に処理し、抑草効果と水稻に及ぼす影響を調査した。

表-5 数種土壌処理剤のノビエに対する効果と水稻に及ぼす影響 (平成9年)

ほ場 条件	処 理 剤 a)	残草ノビエの葉齢分布 %							ノビエに対する効果 ^{b)}				水稻に対する影響 ^{b)}		
		1L 以下	2L 以下	3L 以下	4L 以下	5L 以下	6L 以下	7L 以下	総発 生数 本/m ²	左の内 3L以上 本/m ²	平均 葉 齢 L	最大 葉 齢 L	苗立 本/m ²	穂数 本/m ²	精玄米 kg/a
被覆 わら 無し	ベンチカブ乳剤	6	25	34	19	14	1		26%	11%	2.7	5.2	98%	111%	112%
	トリフルリン乳剤	20	7	20	20	20	13		3%	2%	3.1	5.4	79%	112%	114%
	ベンディメタリン乳剤		11	11	22	22	33		2%	1%	4.1	5.4	49%	87%	98%
	ブタミホス乳剤				33	67			1%	1%	4.4	4.6	35%	92%	99%
	無 処 理	1	4	13	30	35	17	1	259	212	4.1	6.3	67	267	51
被覆 わら 有り	ベンチカブ乳剤		75	25					15%	0%	1.9	2.6	102%	101%	104%
	トリフルリン乳剤	15	46	15	8	8	8		48%	13%	2.3	5.2	107%	109%	105%
	ベンディメタリン乳剤	100							4%	0%	1.0	1.0	95%	95%	105%
	ブタミホス乳剤	100							7%	0%	0.8	1.0	84%	82%	94%
	無 処 理	4		7	7	33	48		12	11	4.7	5.9	50	321	58
麦 跡	ベンチカブ乳剤		4	19	22	30	22	4	69%	84%	4.1	6.5	106%	104%	102%
	トリフルリン乳剤	13	7	27	27	20	7		38%	32%	3.2	5.6	83%	83%	89%
	ベンディメタリン乳剤	8	8	25	8	42	8		31%	28%	3.6	5.9	90%	90%	92%
	ブタミホス乳剤		14	29	29	29			18%	16%	3.6	4.6	96%	93%	95%
	無 処 理	5	10	21	31	15	3	15	17	11	3.8	6.5	82	324	63

a) 10a 当たり薬量は、ベンチオカーブ乳剤：1000ml、トリフルリン乳剤：300ml、ベンディメタリン乳剤：400ml、ブタミホス乳剤：400ml で、グリホサート液剤 500ml と同時処理。散布水量は 100l。

無処理区はグリホサート液剤のみ処理。

b) ノビエの発生数と水稻に対する影響は、無処理区を実数、処理区を無処理区に対する比%で示す。

表-5に平成9年の例を示すが、この表からも明らかなようにいずれの土壌処理剤とも不耕起乾田直播栽培における抑草効果は充分ではなかった。即ち、土壌処理剤散布により10日～2週間程度の抑草がみられたものの、その間の抑草効果は完全ではなく、処理効果の全く認められない一部雑草が無処理（茎葉処理剤単用）区の発生始期とほぼ同時期から発生し始めた。このため、発生数では効果があったものの、残草ノビエの最大葉齢においては無処理区と大差ない場合が少なくなかった。また、ほ場表面を覆う前作の排わら自体は雑草の発生を顕著に抑制したが、その上から土壌処理剤を散布する不耕起乾田直播栽培においては、わらの浮動も効果変動の一因になると考えられた（ポット試験）。

これらのことから、茎葉処理剤と土壌処理剤を同時処理しても、土壌処理剤の加用による抑草期間の延長は見込まないのがよいと判断された。

なお、グリホサート液剤を処理した場合は、土壌処理剤加用の有無にかかわらず散布後5日間、DCPA乳剤とベンチオカーブ乳剤を同時処理した場合は散布後4日間、DCPA乳剤単用の場合は散布後2日間、少なくとも雑草の発生が抑止された。

現在直播栽培に登録のあるベンチオカーブ乳剤とトリフルラリン乳剤については、トリフルラリン乳剤の方が総じて抑草効果は優れたが、この剤はやや強い薬害（苗立数減少）を生じることがあった。一方、ベンチオカーブ乳剤は、効果がやや低かったものの薬害はなく、グリホサート液剤やDCPA乳剤と同時処理した場合その殺草効果を増大させた（後述）。従って、これらの茎葉処理剤と同時処理する場面の多い不耕起乾田直播栽培においては、ベンチオカーブ

乳剤の方が適すると考えられた。

4. 茎葉処理除草剤の効果と水稻に対する影響

乾田期間中に処理する茎葉処理除草剤の使用時期は主にノビエの葉齢を基準に示されるが、その他草種に対する効果は必ずしも明らかでない。そこで、平成8年から2か年、DCPA乳剤、シハロホップブチル・ベンタゾン液剤及びビスピリバックNa塩液剤を、直播栽培ほ場に発生した総計約2,200個体の雑草に処理し、処理時の葉齢あるいは草丈と、処理21日後までに発現した効果の関係を調査した。試験の結果、茎葉処理剤の効果は、処理から入水期までの長短や、同時に処理する土壌処理剤の種類によって大きく異なることがあった。また、一部草種は雑草の生育を待って処理したので、表-6に次のように区分して雑草の生育程度と効果の関係を示した。

播種後処理：水稻播種後の早い時期の処理で、乾田期間中に効果が完成するもの。

入水前処理：入水1～5日前の処理で、入水後に効果が完成するもの。湛水あるいは雑草の冠水による影響と、入水後に処理する除草剤の効果も含む。

入水後処理：雑草の生育を待って調査したもので参考値。

各剤の特徴として、DCPA乳剤は枯殺可能な限界葉齢は他剤より低かったが、ベンチオカーブ乳剤との同時処理により効果が増大・安定した。そして、ノビエの葉齢を基準としてその3葉期に同時処理すれば、ノビエと、これに並列して発生・生育しているメヒシバや各種広葉雑草にも即効的で極大の効果が示された。

一方、シハロホップブチルベンタゾン液剤とビスピリバックNa塩液剤は、いずれも入水前処

表-6 雑草の葉齢、草丈と茎葉処理除草剤の効果

処理剤 ^{a)}	処理時期 ^{b)}	雑草名	葉 齢、草 丈 と 効 果 ^{c)}			
			単 用 の 場 合		ベンチオカーブ乳剤 ^{d)} と同時処理の場合	
D C P A 乳 剤	播 種 後	ノビエ	~2.4 L:●~○	~3.8 L:○	~3.2 L:●	~4.5 L:●~○
		メヒシバ			2.4 L:●	
		スズメノテッポウ	~12cm:○	~17cm:△	13cm:○	
		イボクサ	~3.5 L:●~○	~5.3 L:○~△	~7.0 L:●	~7.5 L:●~○
		スカシタコホウ	2~15cm:○~△		~12cm:●	~13cm:○
		ヒメムカシヨモギ	~4 cm:●	~6 cm:○~△	10cm:○	
	入水前	アメリカセンダングサ			3 cm:●	
		ミチヤナギ	14cm:●		14cm:●	
		サナエタデ	~18cm:●	23cm:○	20cm:●	
	入水後	ノビエ	4.1 L:●			
		メヒシバ	2.3 L:●			
		クサネム	30cm:●			
		ミズガヤツリ	32cm:●			
シ ハ ロ ホ ッ プ ブ チ ル ・ ベ ン タ ゾ ン 液 剤	播 種 後	ノビエ	~4.0 L:●	~5.0 L:●~△	~4.0 L:●~○	~5.9 L:○~△
		メヒシバ	~2.0 L:●	~3.5 L:●~○	1.1~3.5 L:●~△	
		スズメノテッポウ	26cm:○		16~26cm:○~△	
		イボクサ	3.9~4.3 L:△	4.3 L:~×	~4.1 L:●	~5.1 L:○
		スカシタコホウ	~4 cm:●	~8 cm:○	25cm:●	
		ヒメムカシヨモギ	6 cm:●		6 cm:●	
	入水前	アメリカセンダングサ	18cm:●			
		ミチヤナギ			15cm:●	
		サナエタデ			25cm:●	
	入水後	ノビエ	~6.7 L:●	~8.8 L:○		
		メヒシバ	5.9 L:●			
		クサネム	13cm:~×			
		ミズガヤツリ	~39cm:●	~47cm:●~△		
ビ ス ピ リ バ ッ ク Na 塩 液 剤	播 種 後	ノビエ	~4.0 L:●~○	~5.0 L:○	~4.0 L:○	~5.3 L:○~△
		メヒシバ	~2.0 L:●	~3.0 L:●~△	~2.0 L:●	~3.0 L:●~△
		スズメノテッポウ			14cm:●	17~19cm:○
		イボクサ	~9.3 L:●	~11.3 L:○~△	9.3 L:●	
		スカシタコホウ	~15cm:●	~20cm:○	25cm:●	
		ヒメムカシヨモギ	~4 cm:●	~10cm:●~○	~4 cm:●	~10cm:●~○
	入水前	ハルジオン	6 cm:○			
		ミチヤナギ	~20cm:○			
		サナエタデ	~12cm:●	~25cm:○	~12cm:●	~25cm:○
	入水後	ノビエ	~7.4 L:●	~9.6 L:●~○		
		メヒシバ	~5.3 L:●	5.7 L:×		
		クサネム	30cm:●			
		ミズガヤツリ	10~37cm:△			
		クログワイ	35cm 程度:○			
		アゼガヤ	~7 cm:●~○	7 cm:~△~×		

a) 10 a 当たり薬量は、DCPA乳剤:1000ml、シハロホップブチル・ベンタゾン液剤:1000ml、ビスピリバック Na 塩液剤:200ml、ベンチオカーブ乳剤:1000ml で、散布水量は100l。

b) クサネム、ミズガヤツリ、クログワイは入水後の落水処理で処理後は湛水。アゼガヤは畦畔法面での調査で、土壌は乾~半湿潤状態。

c) ●: 枯殺、○: 生育抑制大、△: 生育抑制中~小、×: 無効。

d) 他成分の土壌処理剤と同時処理した場合は、単用の場合と同程度の効果。

理では高葉齢のノビエにも安定した効果を示したが、播種後の処理ではノビエ4葉期が処理限界といえ、メヒシバに対する効果も劣った。即ち、ノビエとメヒシバはほぼ同程度の早さで葉齢が増加するので、ノビエに対する限界葉齢で処理すると生育の進んだメヒシバを取りこぼすことになった。また、効果の完成までに3週間程度を要するとともに、ベンチオカーブ乳剤と同時処理した場合イネ科雑草に対する効果が低下する傾向であった。なお、ミズガヤツリに対してはシハロホップブチル・ベンタゾン液剤の効果が優れ、クサネム、イボクサ、スカシタゴボウ等の広葉雑草にはビスピリバックNa塩液剤の効果が優れたが、ビスピリバックNa塩液剤は水稻にやや強い葉害を生じることがあった。

これらのことから、シハロホップブチル・ベンタゾン液剤とビスピリバックNa塩液剤は、入水前の処理には極めて有効であるが、ベンチオカーブ乳剤との同時処理に適さないこと、さらにメヒシバが多発する場合には処理時期をかなり早める必要があること等から、播種後処理には適しないと判断された。これに対し、DCP A乳剤はベンチオカーブ乳剤との同時処理が可能で各種雑草に即効があるので播種後の処理に適していると考えられた。

なお、後発生した雑草を入水後の除草剤で体系防除するためには、入水前の処理を入水前5日以内に行う必要があった。

5 不耕起乾田直播栽培における雑草防除体系

不耕起乾田直播栽培における雑草防除は、①播種前の防除、②播種期前後から入水期までの防除、及び③入水後の防除に大別される。

このうち、播種前後から入水期までの防除は、不耕起乾田直播栽培の成否にかかわる重要な防

除であるが、作期や播種から入水期までの長短によってはその体系が異なるので必要に応じて地帯別あるいは個別の体系を組む必要がある。そこで、上述の知見をふまえ任意の播種期と入水期に応じた除草体系を組むための手順を検討したので、以下の防除体系の中で示す。また、図-1に6月20日入水を前提とした5月1日播種と5月21日播種の体系作成例を示す。

1) 播種前の防除

播種精度を向上させるとともに次回以降散布する除草剤の効果を完全なものにするため、それまでに発生し繁茂している雑草を防除するので、播種2～5週間前の労力的に余裕のある時にジクワット・パラコート液剤か、グリホサート液剤を散布する。雑草は4月中旬以降旺盛になるので、播種時期がこれより早い場合、あるいは、播種期までに雑草が大きくなり過ぎないと推定される場合は必ずしも実施する必要はない。

2) 播種期前後から入水期までの防除体系

①播種日と入水予定日を決める。

②現地事例、または出芽始期予測法(表-2)から、水稻の出芽始期を推定する。

③年次変動等数日の余裕をみて水稻出芽前に処理するグリホサート液剤+ベンチオカーブ乳剤(またはグリホサート液剤単用)の散布時期を決める。

作期によってはノビエ等の生育がかなり進展しているので、ここでこれら既発雑草を完全に防除することが重要である。以後の防除はノビエの葉齢を基準として設定する。

④グリホサート液剤処理後5日間は雑草の発生が抑止されるので、6日目から葉齢増加速度(葉/日)×日数によりノビエの葉齢増加を計算する(表-4平均+標準偏差の値)。

⑤入水前処理までにノビエが5葉以上になると推定される場合(図-1で5月1日播種の例)は、途中DCPA乳剤の処理を追加する。この場合、播種後のグリホサート液剤は単用とし、ここでDCPA乳剤とベンチオカーブ乳剤を同時処理する(同時処理の場合は3葉期に処理)。

⑥⑤の処理後4日間は雑草の発生が抑止されるので、5日目から再度ノビエの葉齢増加を計算する。入水前処理までにノビエが5葉を越えると推定される場合は、再度DCPA乳剤を処理する(DCPA乳剤単用の場合は2.4葉期に処理)。

⑦入水前5日以内にシハロホップブチル・ベンタゾン液剤かシハロホップブチル乳剤、または

ビスピリバックNa塩液剤を広葉雑草の発生状況に応じて処理する。これら除草剤は高葉齢のノビエに安定した効果があるので、ノビエが多少5葉を超える場合でも処理時期は早めない。

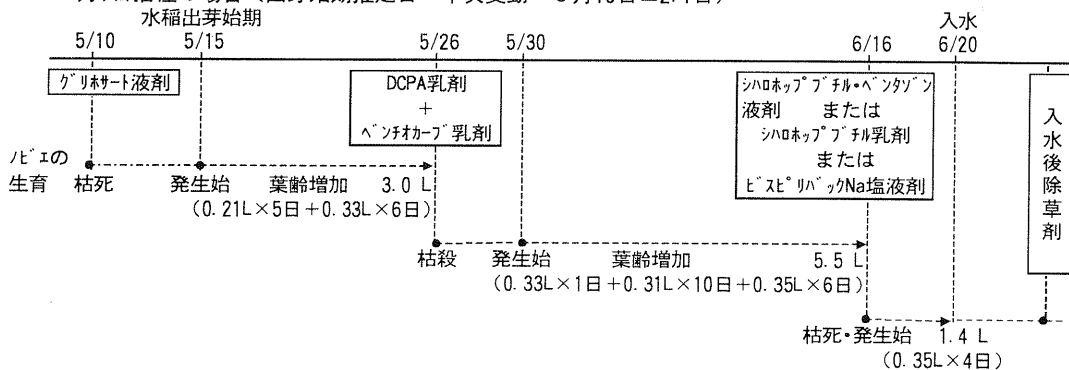
3) 入水後の防除

入水後水持ちが安定したら、ダイムロン・ペンスルフロメチル・メフェナセツト粒剤などを、ノビエが大きくなり過ぎないうちに散布する。この効果を完全なものとするためには、以後湛水状態を保つことが大切であるが、このことは同時に入水前に処理した除草剤の効果増大にも役立つ。

4) 注意点

①上記の例では除草回数削減の点からグリホサ

A : 5月1日播種の場合(出芽始期推定日±年次変動 5月15日±2.1日)



B : 5月21日播種の場合(出芽始期推定日±年次変動 5月31日±1.4日)

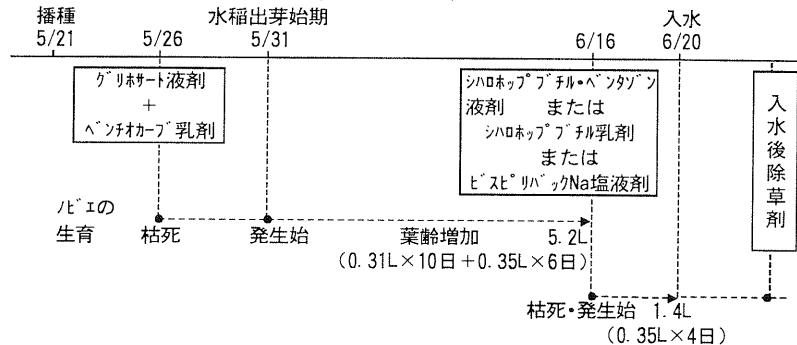


図-1 不耕起乾田直播栽培の雑草防除体系

葉齢増加、例えば $(0.21L \times 5日)$ は、1日当たり0.21葉の葉齢増加速度で5日間を示す。

ート液剤の処理時期を水稻播種後～水稻出芽前としたが、作業や天候の都合で水稻の出芽始期までに確実に処理できない恐れのある場合は播種直前の処理とする。

②播種期の前進は規模拡大に有効であるが乾田期間が長くなると除草回数の増加につながるので必要以上に早播きしない。また、入水期があらかじめ決まっている場合は、除草回数をより少なくし得る播種期を可能な範囲で選ぶ。

③ビスピリバックNa塩液剤は処理後2～3週間

水稻生育を抑制するので、初期生育が収量に影響しやすい早生品種や麦跡などの晩播栽培で使用する場合は注意する。

文 献

田村良文. 1989. 作物の新しい発育ステージ予測法—ノンパラメトリック法の紹介—. 農園64 (9)

杉本真一. 1998. 新除草剤“ノミニー液剤”の効果と使用法. 農薬通信146号

これからは コレ!

農林水産省登録 第20108号

ラウンドアップ ハイロード[®]

スギナも
根まで
枯らす

雨に
強い

効果アップのひみつ

新・特許製剤により、活性成分量をアップ。吸収の速さもアップしたので、これまでと同じ使い方で、むずかしい雑草にもよく効きます。さらに、散布後の雨にも強くなりました。

散布後3時間以上たったら大丈夫!

きちんと枯らすポイント

ラウンドアップハイロードは、一年生雑草には100倍、多年生雑草には50倍、スギナには25倍で散布してください。



●ラベルの記載以外には使用しないでください。●使用前にはラベルをよく読んでください。●本剤は小児の手の届く所には置かないでください。

日本モンサント株式会社
アグロサイエンス事業部
〒108-0073 東京都港区三田3-13-16
三田43森ビル
®:モンサントカンパニー登録商標